

北の海の道の

北海道とサハリンの西の日本海にはアイヌの歴史に深く関わった5つの島がある。南から奥尻島、天売島、焼尻島、利尻島、礼文島、モネロン島*1（海馬島）である。これらの島が絵図に初めて描かれたのは正保元（1644）年松前藩が幕命によって呈上した松前絵図である。この絵図には奥尻島はヲコシリ、天売島はハウレエソ、利尻島はリイシリエソ、礼文島はレフンシリエソ、モネロン島はイショコタンと島のアイヌ語地名が記されている。天売島の東にある焼尻島の地名は記されていない。島の名称が現れることは、そこでアイヌの人たちの生業、生活がなんらかの形で展開されていたからだと思われる。

島のアイヌ語地名は『西蝦夷地名考』、『西蝦夷日誌』などによってさまざまに見える。その由来はヲコシリは「奥・島」もしくは「向こうの島」、ハウレエソは「ヒン子ムシリ」で「男の島」、または「テウレ」で「魚の背腸」ともある。リイシリエソは「高い・島」、レフンシリエソは「沖の・島」、イショコタンは「礮岩・集落」などと思われる。天売島の東にある焼尻島については「ヤンケシリ」の一説に「エハンケシリの略語」で、「エハンケは近く、シリは嶋」とし「テウレは遠く、此嶋（焼尻島）は近き故か」としていること、さらに天売島の「男の・島」に対比して「マチ子ムシリ」、「女の・島」と表現されることもある。こうした島のアイヌ語地名は、島に住むアイヌの人たちの呼称であることはもちろんだが、北海道本島と島とを行き来するアイヌの人たちが本島からの位置、距離、景観などによる地方から見える島の呼び方であることも考えられる。

モシリ*2へ北から、モシリから南へ

松前藩が幕府に呈上した松前絵図以前のアイヌの人たちの様子は元和年間（1615～1624）に松前に潜入したイエズス会の宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスの報告書から詳細に知ることができる。そこには「蝦夷国の西の方に向う一部である天塩国からも松前へ蝦夷人の船がまいります、それらの船は種々の物と共に中国品のようなドンキ*3の幾反をも将来します。そ



れらの蝦夷は高麗から余り遠くないようでございます」と報告されている。天塩アイヌがもってくる中国製絹織物とはいわゆる山丹錦、蝦夷錦*4であるが、樺太から天塩アイヌに渡る流通には宗谷アイヌはもちろんのこと、利尻島、礼文島、モネロン島（海馬島）のアイヌの人たちが深く関わっていたと思われる。

中国と北の海の道のモシリを繋げる中間点に樺太がある。モシリと樺太の繋がりにはリイシリと樺太の山のアイヌの人たちの語りでうらづけられる。利尻島に聳え立つ利尻山が男山で、樺太のトツとトウキタイウツシリが女山という語りが松浦武四郎*5、松田伝十郎*6の文献に記されている。トツは多来加湾*7・オホーツク海に面する元泊郡帆寄村に、トウキタイウツシリは日本海に面する元真岡郡蘭泊村にあるが、利尻山からは二つの山は見えない。そして二つの山からも利尻山は見えない。にもかかわらず近世において山の語りがあることは、樺太と北海道を行き来するアイヌの人

*1 モネロン島

サハリン南西部沖合にある島。

*2 モシリ

〔アイヌ語〕世界。国土。島。

*3 ドンキ

中国の織物。機織前に染色した糸を用いて織り上げた緞子（どんす）と思われる。

*4 山丹錦、蝦夷錦

黒竜江（アムール川）付近から伝わった中国の衣服や絹織物など。

*5 松浦武四郎

〔1818-1888〕江戸末期の探検家。蝦夷地に関心を持ち、しばしば訪れて多数の紀行文や地図を残した。

モシリ

西谷 榮治 (にしや えいじ)

1954年利尻町沓形生まれ。77年國學院大學Ⅱ部文学部史学科卒業、同年利尻町教育委員会勤務。80年利尻町立博物館開館学芸員として勤務。2015年定年退職後、利尻島歴史遺産を島の文化創造として取り組む。著書『利尻の語り』先人たちの聞き語りで綴るもうひとつの島の歴史 自費出版 2010年、『利尻町史』通史編 執筆・編集 利尻町 2000年。所属学会北海道史研究協議会、北海道地域文化学会、アイヌ語地名研究会。

たちが偶然に見たことではなく、頻繁に見ていたことによるものであろう。もちろん、山の形、姿が非常によく似ているためである。こうしてアイヌの人たちが宗谷海峡を行き来し、似ている山を男山、女山として崇め奉ることは、人の動きだけではなく物も同時に動いていることになる。その物の一つに中国からの山丹錦、蝦夷錦があったのだろう。

北からモシリに人と物が動いていたと同時に、モシリから南、すなわち本州各地に物は動いていた。奥尻島からは献上品としての膾膾膾膾、鮫、鮑、煎海鼠、天売・焼尻島からは鮫、鮑、煎海鼠、利尻・礼文島からは鮫、鱈子、煎海鼠、干鮑、昆布、モネロン島（海馬島）からは鮫、鱈、煎海鼠、鮑などの産物が北前船で日本海の各寄港地に運ばれ、そこから内陸へと動き、本州の食・生活文化を支えていた。

こうした島の海産物にはアイヌの人たちが大きく関わっていた。元禄9（1696）年5月、朝鮮王朝（李朝）

の下級官吏李志恒ら8人の朝鮮人が泰山に漂着した記録『漂舟録』（池内敏「李志恒「漂舟録」について」）には泰山、すなわち高い山を有する利尻島でのアイヌの人たちの干魚生産が次のように記されている。「人の住むところはなく、ただ山すそのところに臨時に作られた二〇余軒の草家が見えるだけだった。行ってその家を見ると、家のなかに無数の魚が懸けられており、それらの魚はほとんど鱈と鮫で、ほかに雑魚もあった。名も知らぬ人が干魚を作ろうとしてたくさんの魚を懸けたものだった」、家の前に作られた棹台には「魚がまるで林のように懸けられていた。鯨の干肉も山のように積まれていた」とある。松前名産である鯨の干肉は石焼鯨のことであろう。

李志恒ら8人の朝鮮人が泰山に漂着した元禄9年は、利尻が商場知行制の時代であった。すなわち、島のアイヌの人たちの漁労による海産物は夏商船に積み込まれ松前に運ばれ、そこから本州各地に搬送された。

北の海の道のモシリに居るアイヌの人たちは、サハリン・樺太を経て届く中国からの物を受けるとともに、漁労で島の海産物を作り出し、ともに松前城下に送り届ける社会を構築していた。その後、場所請負制が展開されるようになってからは和人の支配下におかれるようになり、アイヌの人たちは場所請負の漁場で働く人となった。

松前絵図に描かれた北の海の道のモシリは北と南の交易の島であるとともに、本州の伝統的な食・生活文化を支えるための海の物を漁獲生産し送り出した島といえる。そこにおける交流・生産の担い手が島のアイヌの人たちであった。



樺太のトウキタイウツシリ

松山勝英さん（神奈川県鎌倉市）撮影

*6 松田伝十郎

[1769-1843] 江戸時代後期の探検家。間宮林蔵とともに樺太奥地を調査し、離島であることを確認した。

*7 多来加湾

サハリン中南部のロシア名テルペニア湾のこと。